

中心市街地整備推進機構としての中心市街地活性化への取り組みについて

財団法人岐阜市にぎわいまち公社 副主幹 白橋 利明

1. はじめに

（財）岐阜市にぎわいまち公社（以下、公社）のある岐阜市は、我が国のほぼ中央部である岐阜県南西部に位置し、人口約42万人、面積約203km²の規模を擁しています。名古屋市からは30km圏内に含まれJRで最短18分、中部国際空港からは1時間以内の中部圏でも有数の中核市です。

また、緑豊かな金華山、清流長良川、1300年以上の歴史を誇る鶺鴒など自然と歴史・文化に恵まれています。戦国時代には「美濃を制する者は天下を制する」と言われた「斎藤道三公・織田信長公」の国盗りの舞台となり、昔から人・物の流通拠点として発展してきました。

岐阜市の中心市街地は、大きく「岐阜駅周辺地区」と「柳ヶ瀬地区」の2つの地区から構成されており、岐阜市の中心市街地活性化基本計画はこの2つの地区を含めた約100haの区域設定で平成19年5月28日に内閣総理大臣の認定を受け、その後岐阜大学医学部等跡地周辺地区を含む約170haへ区域を拡大し、平成21年12月7日に変更認定され現在に至っています。平成22年度末までに全69事業の内23事業が完了し、他の事業は実施中となっています。

2. 中心市街地の現状

○「岐阜駅周辺地区」

「岐阜駅周辺地区」は、JR岐阜駅、名鉄岐阜駅及び駅から放射状に伸びる乗合バスの乗降場を有し、交通結節機能としての役割を果たすとともに、こうした優れた立地条件を活かして商業機能が集積しています。しかし、大型店舗であった新岐阜百貨店、岐阜パルコがそれぞれ平成17年12月、平成18年8月に相次いで撤退、終戦直後からJR岐阜駅前に形成された繊維問屋街も流通体系の変化により衰退傾向にあるなど、様々な課題があります。しかし、JR岐阜駅周辺ではJR鉄道高架事業（平成10年度完成）、岐阜駅北口の駅前広場整備事業（平成

21年度完成）が終了したことにより、都市の基盤整備は進んできました。また、いくつかの市街地再開発事業が進展しており、平成19年度には商業施設、福祉・医療施設、高齢者向け優良賃貸住宅、分譲マンション等で構成される43階建ての複合ビル「岐阜シティ・タワー43」が完成し、「問屋町西部南街区」においても37階建ての複合ビル「岐阜スカイウイング37」の建設がスタートしており、平成24年度に完成予定となっています。また名鉄岐阜駅周辺でも新岐阜百貨店跡地に新商業ビル「ECT（イクト）」が平成21年9月にオープンし、歩行者通行量も前年度比において増加傾向に転じ岐阜駅周辺は活性化の兆しが見え始めています。

○「柳ヶ瀬地区」

一方、中心市街地のもう一つの核である「柳ヶ瀬地区」は、東西、南北とも約300mの街区で、ほぼ全ての通りがアーケードで覆われた商業地区で、かつては映画館などの娯楽施設、各種小売店や飲食店が軒をつらね、市内及び周辺地区の住人、さらには来訪した人々も利用する繁華街として多くの人々でにぎわっていましたが、平成11年以降、京都近鉄百貨店、長崎屋、岐阜センサ、岐阜メルサといった大型店舗が相次いで撤退しました。また市郊外や周辺市町村における相次ぐ大型店舗の新規出店



ドン・キホーテ

に伴い、それまでの柳ヶ瀬の購買層がそれらの店舗へ流出し、小売業商品販売額や歩行者通行量の減少に歯止めがかからない状況となってきています。そんな中、大型空き店舗となっていた「旧岐阜メルサファッション館」に「ドン・キホーテ」が平成23年4月に新店、その向かいの「旧岐阜メルサグルメ館」にも「シグザ神田」という商業施設がオープンし、また平成24年4月には柳ヶ瀬通北地区において商業施設・福祉施設・住宅で構成される再開発ビルの完成が予定され、それらの大型商業施設などのオープンによって今後の変化が期待されています。

3. 会社の沿革と中心市街地との関わり

会社は、昭和43年に(財)岐阜市開発公社として岐阜市の全額出資の財団法人として設立され、平成7年に(財)岐阜市都市整備公社に名称変更後、平成15年4月に岐阜市における都市整備事業を補完的に行うことを目的とし、「(財)岐阜市にぎわいまち公社」として名称変更・改組し、中心市街地活性化に関する業務の他、まちづくりに関する調査研究及び情報の提供、市民のまちづくりに関する活動の育成と支援及び助成、市営駐車場の管理業務、レンタルサイクル業務などを行ってきました。平成18年8月には岐阜市から中心市街地整備推進機構に認定され、各関係機関及び地元商店街と連携し、中心市街地の活性化を推進しています。

4. 中心市街地整備推進機構認定後の活動

○まちなか情報発信交流拠点「柳ヶ瀬あい愛ステーション」の開設・運営

平成20年7月に開設した商店街情報発信拠点整備事業「柳ヶ瀬あい愛ステーション」の開設とその後の運営が柳ヶ瀬地区と関わっていく大きな転機となりました。柳ヶ瀬あい愛ステーションは、経済産業省の「戦略的中心市街地中小商業等活性化支援事業」の補助金を受け、柳ヶ瀬地区内の空き店舗を活用した施設で、まちなかの情報発信機能、休憩や打合せ及びギャラリーなどに利用できる交流機能、オストメイト対応の多目的トイレ、授乳室やキッズパークなどの公益機能の3つの機能を持ち、誰もが気軽に利用することができます。また、中心市街地のにぎわいを創出するために、イベントを開催できるステージやラジオ放送設備なども備え、火曜日と金曜日に柳ヶ瀬あい愛ステーションからラジオの生放送を



柳ヶ瀬あい愛ステーション

行い、まちの情報などを発信しています。

平成20年度の来館者数は(7/5~3/31)で30,365人、平成21年度には50,813人、平成22年度には54,969人の来館者があり、年々来館者数が増えています。

また、ハード機能を提供するだけでなく、平成21年度からは新たに専任の職員を雇用し、商店街と連携したソフト事業を展開して商店街の活性化を進めています。

当初は「行政は箱モノをまた作るのか?」「そんなお金があれば商店街への補助をするべきだ」など商店街からは批判もありましたが、ソフト事業の展開に伴い、商店街関係者との日常的な交流の中から信頼関係が築かれ、現在では商店街からも必要な施設として認識され、理解も得られてきました。

そうした日常の交流の中で築いた信頼関係のおかげで、他の事業についてもより協力が得られるようになってきたと考えています。

5. 商店街関係者と連携したソフト事業の展開

○七夕まつり in 柳ヶ瀬・クリスマス飾り in 柳ヶ瀬

市内の幼稚園・保育園などの園児に、夏は七夕かざり、冬はダンボールパネルをツリーに見立てたクリスマス飾りを作成していただき、各商店で期間中に展示・管理してもらいます。

本事業は大きく二つの狙いがあります。ひとつは作成した次世代の顧客である子どもたちに柳ヶ瀬を知ってもらうとともにその保護者を柳ヶ瀬に誘導し、さらに参加した幼稚園や保育園が他の飾りも見て回ることで、にぎわいの創出と共に回遊性を向上させていきます。

子どもや孫が作成した飾りを見るために、父兄や祖父母が柳ヶ瀬を訪れることは、自分たちの青春時代に訪れた柳ヶ瀬の思い出や店舗への回帰の機会にもなっており、ショッピングモールとは違った商店街ならではの商



店や店主の魅力を伝える機会となっています。

もうひとつは、各店主が事業に直接関わるため、事業の効果を実感することができ、行事への積極的参加など主体的行動を促していくことです。

従来の商店街でのイベントは、商店街役員の方などごく一部の方だけがかかわり、各商店では行事の効果が実感しにくく、さらにイベント会社などへの委託により行っていた事業が多いため、どこか受け身に回っていた現状がありました。事業を重ねて行くことにより、主体的に参加しようとする商店が徐々に増えてきました。

○小学校社会見学プログラム「柳ヶ瀬商店街探検隊」

毎年、市内の小学校3年生が学校の授業として、地域の商店街の勉強のために柳ヶ瀬商店街を訪れていました。しかし、日常的に商店街と付き合いのない郊外の小学校にとって、店主とのプログラムの打ち合わせや資料作成などが難しく、せっかく市内の小学生が柳ヶ瀬を訪れるものの商店街の魅力がうまく伝えられなかったり、打ち合わせ不足による誤解があったりと機会を活かしきれ

ていない状況でした。

そこで商店街と連携し、小学校の先生たちからも意見を聞きながら、小学校の社会見学に合わせた企画・提案として「柳ヶ瀬商店街探検隊」というプログラムを商店街とともに作成しました。

このプログラムでは子どもたちが商店街の概要をまとめたDVDを見たあとに、グループに分かれ「指令書(ミッション)」に基づき商店街探検に出発します。「指令書(ミッション)」の種類は約40種類あり、例にあげると「柳ヶ瀬を流れる小川『アクアージュ柳ヶ瀬』のヒミツをリサーチせよ!!」、「〇〇商店で、〇〇のヒミツをリサーチせよ!!」など、「柳ヶ瀬の特徴」や「お店の特徴、工夫、願い」をうまく小学生に知ってもらい体験してもらえるものになっています。

小学校、商店街から好評を得ており、平成22年度には12校、本年度は市内にある小学校の約半分にあたる20校が柳ヶ瀬に社会見学に訪れ、店主からも「こんな形の体験をさせてあげたい」など、主体的に協力する店舗も増える一方、「柳ヶ瀬商店街探検隊」に参加した小学生が今度は保護者を連れて柳ヶ瀬を訪れ、自慢げに商店の魅力伝える姿も見られるようになってきました。



6. その他の中心市街地活性化事業

○まちなか文学散歩プロジェクト推進事業「岐阜まち物語」の開催

中心市街地のにぎわい創出を図るため、平成18年度より岐阜市にゆかりのある歴史や文化などを掘り起こし、コンサートや公演、展示などをすることで、岐阜市の中心市街地とその周辺地域の魅力を感じてもらう「岐阜まち物語」を行っています。本年度は12月に「岐阜まち物語～第6幕～」として開催を予定しています。

「岐阜まち物語」は地域住民や市民団体で構成された



「岐阜まち物語実行委員会」（公社が事務局）にて企画運営され、岐阜市にゆかりのある「川端康成」や彫刻家ロダンのモデルとなった唯一の日本人女性「花子」に関わる公演や資料の展示など毎回趣向を凝らしたイベントを2週間程度の日程で開催し、市内外からの多くの参加者でにぎわっています。

○中心商店街活性化プロデュース事業

平成22年度より、中心市街地活性化に関する具体的かつ実務的ノウハウ等を有する商店街活性化プロデューサーを全国公募し、商店街関係者等と連携し中心市街地の活性化を図るもので、プロデューサーの持つ知識や経験、人的ネットワークを活用し、商店街のにぎわいを創出するための企画・提案をするとともに、商店主を対象

とした販売促進に係る勉強会を実施し、併せて空き店舗の利活用に関する仕組みの企画・立案及び実施を行っています。

○空き店舗対策「ワンストップ相談窓口」の開設

中心商店街へ出店を検討している希望者からの相談に対応できる「ワンストップ相談窓口」を平成23年に開設しました。

これは行政、商工会議所などの支援・助成制度及び空き店舗情報の発信・提供のほか、歩行者通行量の情報や商店街のイベント情報などを一元的に管理し、相談者に提供することで、空き店舗の減少につなげていくものです。

現在、柳ヶ瀬周辺地区の空き店舗情報の収集を行いながら、公社ホームページへの掲載準備を進めています。

7. おわりに

公社はまちづくり活動の中間支援組織として、行政や商工会議所、商店街、まちづくり活動団体などと連携しながら各種活性化事業を展開し、また中心市街地にある文化、歴史など蓄積されているまちの魅力や人材を活かしながら、市内外に広くアピールすることにより中心市街地の活性化を進めて行きたいと考えています。

（しらはし としあき）